

# あぁ憧れのリゾートホテル 海気館



## 関東の須磨 松の美しい海辺

昔は、なにより松林が名所の条件でした。

稲毛海岸には、美しい黒松林が浜辺に続き、海舟白帆が波間に見え、遠くには神奈川、千葉の峰々、そして富士までも望めます。須磨にも恥じぬ景勝地でした。

## 1888年(明治21年) 海水浴場の開設

明治になると、外国人の影響で、病氣治療の方法として海水浴が始まります。お医者さんの指導の下で、海水を浴びていたようで、レジャーではなかったようです。そして稲毛の海水浴は海気館とともに始まります。

## 1888年(明治21年) 海気館開館

8月に稲毛海気療養所が仮営業を始めます。発案者は、佐倉済生堂院長で千葉医学会長の濱野昇。はじめは医療施設でしたが、数年後千葉の旅館「加納屋」に営業が移り、「海気館」として稲毛を代表する名旅館になります。

## 1894年(明治27年) 鉄道開通

江戸川に鉄橋ができ、本所(現錦糸町)と佐倉間に総武鉄道(現JR)が開通します。

1894年(明治27年)幕張駅、そして1899年(明治32年)稲毛駅が開業し、稲毛海岸はいっきに観光地として発展していきます。

## ガイドブックに紹介された海気館

まずは、1910年(明治43年)の大浜六郎著「避暑案内」を見てみましょう。

「午前9時15分向国停車場を出発し、亀戸・市川・中山・船橋・津田沼・幕張の各停車場を経て午前10時27分稲毛停車場に着いた。」 「汽車賃は3等35銭・2等54銭・1等90銭。」 「稲毛は海岸にそった一集落で、袖ヶ浦(稲毛海岸)海水浴場には磯馴松(そなれまつ)幾百本と生茂り播州(兵庫県西部)の舞子の浜の趣がある」と記されています。

なお海気館については、「この館は風景最もよく、稲毛大山の森の中に客室を設け温浴(海水を沸かしていた)ができ、さらに清水も湧き出している。」とあります。宿泊料は、1等1円50銭、2等1円10銭・三等85銭だったそうです。因みに明治39年の高級リゾート地箱根の宿泊料が1等2円・2等1円20銭・3等85銭ですから、海気館も決して負けていません。



白砂青松の面影を残す稲毛公園の松林。海辺の記憶を伝えます。

## 鷗外や藤村も訪れます

1906年(明治39年)8月6日河東碧梧桐(かわひがしへきごどう)が海気館に宿泊します。3年半にわたる大旅行記「三千里」はこの海気館から始まります。9月6日～9日には森鷗外が宿泊します。

1908年(明治41年)4月田山花袋が宿泊し、のち海気館の女中の話をもとに短編小説「弟」を執筆します。9月16日には海気館滞在中の画家和田英作を島崎藤村が訪ねています。

◎ガイドブックには・・ピリヤードも

## 明治44年(1911年)落合昌太郎著「郊外探勝その日帰り」

「稲毛駅を下車すると、もうわずが700mでうっそうとした松林になる。それを目当てに、右に東京館、左に養生館、中央の森の中のが海気館という宿屋である。松は御料林だそうで千古の翠がしたたるようだ。海は遠浅で波は静か、左には房総の山々、遠くには東京湾を往来する白帆の船を眺めて、まるで絵の様なところだ。海気館には松林の間に離れ屋が幾棟となくあって内緒話も人に聞かれない。更にピリヤード台や海水を沸かした浴場もある。」



## 1918年(大正7年)小山田清著「房総静養地案内」

「街道を隔て遠浅の海を擁す。干潮の時は海水遠く干ておんな子どもの遊びにちょうど良い。その老いた松が風になびいて傾ける様子は舞子の風景に似たものがある。ちかごろ附近に飛行機の練習所ができた。旅館は、清遊館・養生館・海気館などがあり、いずれも名旅館である。」

この飛行機練習所は明治45年奈良原三次が、稲毛の浜に構えた日本初の民間飛行場を指すものと思われます。ただ大正6年の台風により飛行場は稲毛の浜を離れていますので、執筆と発行に少しずれがありそうです。

## 1921年(大正10年)京成電車が開通



1921年(大正10年)京成電車千葉線が開通し京成稲毛駅が開業します。海気館には、6月13日～19日の間、有島武郎が滞在します。また、里見弴の弟子中戸川吉二が海気館に駆け落ちし、その顛末を里見弴は「おせ

# 海気通信

Kaiki News

9号  
2016/4/1

発行

千葉市民ギャラリー・いなげ  
〒263-0034  
千葉市稲毛区稲毛1-8-35  
TEL: 043-248-8723  
FAX: 043-242-0729  
<http://business4.plala.or.jp/g-inage/>

っかい」と言う小説にして翌1922年(大正11年)に発表します。一方、中戸川は「北村十吉」と言う小説にしてこれもまた発表しました。海気館にとってきっと良い宣伝になったことでしょう。

ところで大正時代、東京からの汽車賃と宿泊料は？

## 1925年(大正14年)松川二郎著「新海濱案内」

汽車・電車賃

省線(現JR) 両国橋駅→稲毛 1時間 3等54銭

京成電車 本所押上→稲毛 1時間 54銭

宿泊料(海気館) 1等4円・2等3円

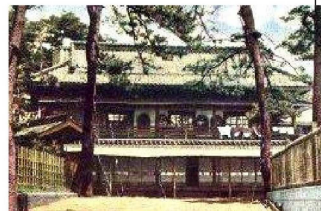
昭和に入ると少し様子が変わってきます。

## 1928年(昭和3年)茅原華山「湖海静遊記」

「一時は大分盛んであったようだが、今は不景気の風が吹き捲るのも一大要因に相違ないが、大磯が寂れると同様に、稲毛も寂れたようである。」

長期滞在型リゾートから簡便な観光地へ

## 1935年(昭和10年)松浪次郎著「夏のプラン」



【海気館本館(年代不明)】

「ここは海に近く、松林の翠緑深く、海は遠浅であって水は綺麗、しかも波すこぶる穏やかである。先ず、東京湾第一の海水浴場と云へる。ここに海気館、東京館などの大規模の旅館があり避暑客の便宜を図っている。」

このころから日中戦争、太平洋戦争と続き、だんだん旅どころではなくなってきて、ガイドブックも発行されなくなってしまいます。

戦争が終わると、また稲毛は東京近郊の海水浴、潮干狩りの名所として復活し、賑わうのですが、リゾート地としてのイメージは少しずつ失われていきます。それで・・海気館は？

「海気館」と言う名前の旅館が1980年(昭和55年)くらいまで営業しているのですが、加納屋との関係を含めて詳しいことがほとんどわかりません。街の都市化とともに静かに幕を閉じたようです。

※海気館の古写真は千葉市立郷土博物館からお借りしました。